

2017年12月8日

『「リベラル保守」宣言』 中島岳志著 を読んで

改めて、保守と何か、リベラルとは何か、について考えさせられた。

今まで、いわゆる保守に対して、率直に言ってあまりいいイメージを持っていなかった。歴史的に見ると、保守派イコール体制派であり、既得権益にしがみついて、自己の立場を危うくする反体制派（革新）を、権力を使って徹底的に弾圧する勢力、のイメージしかなかった。

この本は、今まで自分が描いていたそのような保守のイメージを大きく打ち砕くものであった。

「真の保守思想は他者への寛容を是とするリベラルマインドによってこそ生命を得ることができます。」と著者は言う。

20世紀の歴史を振り返ると、共産主義や全体主義の国々は、絶対正義のもと価値観が一元化して、言論の自由のない極端な統制社会であった。保守はこの極端な統制と闘い続けてきた。ゆえに、「保守こそが真のリベラルを主張することができる。」と著者は主張する。

リベラルとは一口に言えば多様性を尊重する思想である。

宗教や文化の違いは真理の違いではなく、それは単に真理にいたる道筋の違いにすぎない。様々な違いを乗り越えて、万人を包括する普遍的真理という山の頂上を、数多の登山口から目指しているようなものである。

「但し、有限の人間は無限の真理を完全に掌握することはできない。我々が知り得るのは、真理の陰であって、真理そのものではない。真理は常に地平の向こう側に存在する。」

保守と左翼の違いを著者は次のように指摘する。

左翼思想の根本にあるのは、「人間の理性によって理想社会を作ることが可能と考える立場……。人間の努力によって世の中は間違いなく進歩するという発想……」

保守は制約のない自由を嫌う。

「社会的自由とは、自由が平等の抑制によって確保される状態」を言う。

あらゆる規制から解放された自由は、制約なきゆえ他者の自由と衝突する。野放し状態の自由は、かえって人々の自由を奪うことになり、結果として世の中を混乱させることになるのだ。

「制約があって自由がある。適切で安定的な秩序がないところに自由は存在しない。無秩序こそが自由を阻害する。」ということである。

保守は理性を決して軽んじてはいないが、常に懐疑的である。ユートピア社会の実現や進

歩思想は理性の過信として考える。

「人間の不完全性や能力の限界から目をそらすことなくこれを直視する。不完全な人間が構成する社会は不完全なまま推移せざるを得ないという諦念を共有」し、「特定の人間によって構想された政治イデオロギーよりも、歴史の風雪に耐えた制度や良識に依拠し、理性を超えた宗教的価値を重視する」ことを理想とする。

保守は、未来への進歩に対し疑念を持っているが、人間社会の変化そのものを否定するものではない。何を変えるべきか、何を変えてはいけないのか、その見極めを「歴史から継承された平衡感覚」に求める。

「歴史から継承された平衡感覚」とはいったい何を指すのだろうか。

現在の秩序は、過去の歴史的蓄積や社会的経験知によって支えられ今日まで維持されてきた。我々は「伝統という無限の暗黙知のなかで生き、過去の集合知に依存して日々の判断を下している。伝統は固定化した実体ではなく、精神のかたちとして存在する」のである。

伝統は再帰的な存在であり、単に慣習の中に埋没していたり、特定の文化に盲目的にしがみついていたりは伝統になりえない。伝統とは、伝統は何かという問いを發することから芽生えるもので主体的な意志が必要になる。

保守の考え方は、単に現状にしがみつくと固執的な反動ではなく、また急進的な革命主義でもない。伝統という精神に基づいて斬新的な改革を進めていく考え方である。それは優良な老舗の商品開発と類似していると著者は指摘する。

保守は単に変化を嫌う「反動」ではない。人間の不完全性を認識し理性の過信を諫める姿勢は、当然自己に対しても懐疑的である。それゆえに、何よりも他者との議論を尊重し自由な討議を重視する。自由な討議は基本的に、何よりも価値観の多様性を認め合う包摂的で寛容な精神が必要である。

「他者と遭遇し、価値の葛藤に耐えながら対話し続け、その中で自己発見していく人間こそが保守的人間」と著者は断言する。

私は、「リベラル保守」とは理性の過信による統制された社会を忌避し、他者に寛容であり、何より多様性を尊重する自由な討議を重視し、歴史的に蓄積されてきた社会的経験知を基本にして、永続的に斬新的な改革を実行する、と解釈した。